

お月さまに恋したスッポン

大島 行雲

あるところに小さな小さな沼がありました。

その小さな小さな沼には、小さな小さなスッポンが住んでいました。

スッポンは、カメの仲間でドロガメとも言われている、あまりキレイだとかキレイだとかは言ってもらえることの少ない動物です。

毎日毎日、小さな小さなスッポンは小さな小さな沼の中で、泳いだりゴハンを食べたりしてすごしていました。

ただ、そのスッポンには少しだけ変わったところがありました。夜になると、いつも上ばかり見ているのです。

同じ沼に住んでいる友だちのスッポンは、いつもふしぎに思っていました。いつしよにあそぼうと思っただけでも、きこえてくるのかきこえていないのか、スッポンはずっと上ばかり見ているからです。

「なんてキレイなんだろう」

スッポンは夜空のお月さまを見上げながら、つぶやいていまし

た。

いつもいつもスッポンが上を見ていたのは、空に浮かぶお月さまを見るためだったのです。

まっくらな夜の空の中で、とてもとてもキレイに光っているお月さまが、スッポンは大スキでした。

お月さまをながめていると、いつまでもいつまでもあきなくて、友だちから呼ばれても気がつかないくらいです。

「本当にキレイだなあ」

スッポンはまたつぶやくと、小さなため息をつきました。

来る日も来る日も、スッポンは夜になると空を見上げて、うつとりとお月さまをながめていました。

だから、雨がふったり、くもが多かったりして、お月さまが見えなくなってしまう夜は、スッポンはとてもかなくなっています。

スッポンは、まんまるい満月のお月さまも、ほそい三日月のお月さまも、みんな大スキでした。

お月さまは見るたびにちがう顔でしたが、いつもキレイに光っているからです。

でも、お月さまは高い空の上において、スッポンは遠くの沼の中から見つめていることしかできません。

「お月さまに会ってみたいなあ……」

スッポンはつぶやくと、小さなため息をつきました。

ある晩、スッポンはいつもどおり、お月さまを見上げていました。た。

その日はくものないよく晴れた一日で、大きなお皿みたいな満月が、とてもキレイに光っています。

すっかりうつとりしていたスッポンは、どうしてもお月さまに会いたくて会いたくてたまりません。もっと近くで見て、お月さまと話ができれば、どんなに幸せだろうと思いました。

「近くで見たら、もっとずっとキレイなんだろうな・・・」

しばらくお月さまをながめていたスッポンは、自分に言いきかせるように言いました。

「ここにじっとしてたんじゃ・・・いつまでたっても同じだ・・・」

スッポンは大スキなお月さまを見ながら、ついに決心しました。

「決めたぞ。ボクはお月さまに会いに行く！」

思い立ったが吉日とばかりに、すぐにスッポンは小さな沼を泳ぎ始めました。

どんどん、どんどん泳いで、小さな沼のはしっこにたどりつきました。

空を見上げると、お月さまはまだちつとも近くなっていません。思いきって、スッポンは小さな沼から地面に上がって歩き始め

ました。

てくてく、てくてく歩いて、少しつかれたので足をとめました。空を見上げると、お月さまはまだまだ遠くでキレイに光っています。

スッポンはカメの仲間なので、歩くのがとてもおそいのです。それでも、スッポンはあきらめないで、また、てくてく、てくてく歩きつづけました。

てくてく、てくてく、足のはやいウサギだつてつかれてとまってしまうくらい、長く長くスッポンは歩きつづけました。

すっかりつかれてしまったスッポンは、ハアハア息をしながら、空を見上げました。

それでも、お月さまはさつきとまったく変わらないくらい小さいまんまるのままです。

スッポンは、とてもがっかりしてしまいました。

夜空に浮かぶお月さまに、スッポンは言いました。

「ねえ、お月さま、ボクはお月さまには会えないの？」

お月さまの答えはきこえません。

なんとかしてお月さまに会いたいスッポンは、ピョンピョンとんで、お月さまに手をのびました。

でも、お月さまはとても高いところに浮かんでいて、小さな小さなスッポンがどんなにジャンプしても、まったく手がと

どきません。それでも、あきらめきれないスッポンは、必死になつてピョンピョンとびつづけます。

何度とんでも何度とんでも、手がとどかないのに、それでも何度も何度もとびつづけているうち、スッポンはともかなしい気持ちになつて、涙がこぼれてきました。

キラキラ光るまんまるい満月の下で、スッポンがしょんぼりしている、だれかがスッポンに声をかけてきました。

「そんなところで、なにをしてるんだい？」

声が出た方をスッポンを見ると、あの小さな小さな沼にいつものように住んでいた友だちのスッポンが、いつの間にか横に立っていました。

「キミこそ、どうしてここにいるの？」

スッポンはお月さまに会いたくて、ずいぶん長く歩いてきたはずだったので、ふしぎになつて、ききました。すると、友だちのスッポンはこたえました。

「キミこそ、どうしてここにいるの？ 急に沼を出ていつちやうから、ボク、心配になつて追いかけてきたんだよ。」

どうしてキミは、ひとりで泣いたりしてるの？」

そうきかれて、また、スッポンはお月さまを見上げました。

「ボク、どうしてもお月さまに会いたくて、ここまで来たんだ。でも、どんなに歩いてても、どんなにとびはねても、お月さまに全

然、近づけなくて、それで、かなしくなつちやったんだ」

そう言つて涙をぼろぼろこぼすスッポンに、友だちのスッポンが言いました。

「お月さまはとつてもとつてもキレイだけど、とつてもとつても遠くにいるんだよ。だから、ボクたちの足じゃ、お月さまにたどりつく前につかれて倒れちやうかもしれない。」

みんな心配してるから、もう、沼に帰ろうよ」

友だちにそう言われて、しかたなく、スッポンは小さな小さな沼に帰ることにしました。

お月さまに会えなくてしょんぼりしていたスッポンは、ここまて来るときはひとりでてくてく歩いてきた道を、今度は友だちのスッポンとふたりで帰つていきます。歩いている間、友だちのスッポンがはげまそうとして、いろいろと話しかけてくれました。

そのうちスッポンは、友だちと話しながら歩いているのがとても楽しくなつてきました。

そのころ、スッポンが仲良く沼へ帰つていく姿を高い高い空の上から見下ろして、お月さまはうらやましそうにつぶやいていました。

「たのしそつだなあ。ボクもあんなふう自由に動き回つて、友だちと遊んだりできたら、どんなにいいだろう」

いつも地球のまわりのほとんど決まった道を、ひとりでもわっているお月さまは、ずっとずっとスッポンにあげられていたのです。

スッポンがお月さまを大スキなように、実はお月さまもスッポンが大スキでした。

おわり